

アウトリーチ活動の意義・課題についての一考察

現代における芸術文化の社会的役割

研究開発室 的場 康子

目次

1. はじめに	27
2. アウトリーチとは何か	28
3. アウトリーチの事例紹介	30
4. アウトリーチの意義	32
5. おわりに アウトリーチの課題・今後の方向性	33

要旨

アウトリーチとは、もともとは社会福祉の分野で、クライアントの表明されないニーズ把握の手法として開発されたものである。そこから出発した芸術文化におけるアウトリーチは、芸術家(芸術団体ないし文化施設)が、普段、芸術文化に触れる機会の少ない市民に対して、(その生活の場に向いていって)働きかけをおこなうもので、日本語で表記するならば、「芸術普及活動」あるいは「教育普及活動」と言われるものである。

芸術文化におけるアウトリーチの実施主体としては、劇場、ホール、美術館といった文化施設や芸術家・芸術団体などが挙げられる。財団法人地域創造の調査結果によると、実際に実施されているアウトリーチは、「体験・創作型ワークショップ事業」や「子ども、青少年、親子向け鑑賞事業」「地域派遣型事業」が多い。

子どもに対するアウトリーチ活動の場合には、教育的効果及び将来の観客としての育成、また、一般市民向けの場合には顧客開拓、さらに、高齢者施設や病院等、ホールや美術館等の文化施設に足を運ばない人々を対象とする場合には、精神的癒し、症状の緩和等というような意義がある。一方、芸術家自身にも大きく刺激を与えることができる。このように、アウトリーチ活動は、芸術文化を享受する層を広げ、さらに創作する側の創作意欲を高めることに寄与するということができ、このことを通して、芸術文化が社会に果たす役割を広げ、わが国の芸術文化をより豊かなものに発展させる可能性を秘めているといえる。

文化施設・芸術団体等がアウトリーチ活動を行うに当たっての課題としては、地域社会内外の様々な機関との結びつきを深めていくことが挙げられる。さらに、芸術文化が様々な社会的課題の解決のために、どのように役に立つのか、という視点に立って芸術活動を展開していくことも重要である。このように、様々な社会的課題の解決をも視野に入れたアウトリーチ活動は、文化政策面でのニーズと社会政策面でのニーズを結び付ける接点として位置づけることができるであろう。

キーワード：芸術文化、アウトリーチ、芸術普及活動

1. はじめに

(1) 厳しい芸術文化を取り巻く環境

不況下の近年、芸術文化^{*1}を取り巻く環境も厳しくなっている。

例えば、数年前から美術館が相次いで閉館している。1999年2月にセゾン美術館（池袋）、同年8月に三越美術館（新宿）、2001年3月に東武美術館（池袋）、同年4月に千葉そごう美術館（千葉市）、同年6月に高崎タワー美術館（高崎市）、同年10月に小田急美術館（新宿）、ヘンリー・ミラー美術館（大町市）、2002年3月に伊勢丹美術館（新宿）等、東京の百貨店系美術館を中心に次々と閉館した。公立の美術館も、予算削減で展覧会の回数や規模の縮小に追い込まれている。

また、いわゆる「ハコもの行政」的な流れで、あるいは「バブル期の副産物」として、ここ数年、全国に次々と音楽用ホールが誕生しているが、運営が低調で厳しい状況に追い込まれている施設もある。限られた（あるいは縮小気味の）予算の中で、施設維持コストが膨れ、芸術活動に向けるべきコストを圧迫してしまっていることもある。大都市圏においては、次々と設立された民間音楽ホールが、「限定的な」顧客の奪い合いにより、今や厳しい生存競争の中に置かれているのも事実である。

このように、芸術文化を享受することにおいても、また創造することにおいても、経済的な不況下にあって、芸術文化環境が大きく変わってしまっているのが実情である。

(2) 文化芸術振興基本法の成立

このような中、2001年12月、文化芸術振興基本法が施行された。その制定の狙いは、「経済的な豊かさの中にありながら、文化芸術がその役割を果たすことができるような基盤の整備及び環境の形成は十分な状態にあるとはいえない」「我が国の文化芸術の振興を図るためには、文化芸術活動を行う者の自主性を尊重することを旨としつつ、文化芸術を国民の身近なものとし、それを尊重し大切にすよう包括的に施策を推進していくことが不可欠である」として、「文化芸術の振興についての基本理念を明らかにしてその方向を示し、文化芸術の振興に関する施策を総合的に推進するため、この法律を制定する」と「前文」に書かれている。

内容が総花的であることや、国民的議論を尽くせずに拙速に成立したことなど、各界からの批判もあるが、同法の制定は、文化芸術振興にかかわる国と地方自治体の責任を明示した法律ができたという点で、歓迎すべきことである。同法成立を出発点として、芸術文化に行政あるいは市民がいかにかかわるべきなのかを、皆が考えるきっかけとなることが期待される。たとえ、出口が見えない不況下にあっても、文化を創造・享受しやすい社会にするために、今後、どのように法を活用していくのかが問われているといえよう。

(3) なぜ今、アウトリーチなのか

このように、厳しい経済環境において、芸術文化を創造・享受する環境が影響を受けつつある中で、それぞれの文化施設

の中には、生き残りをかけて様々な工夫を行っているところもある。その代表的なコンセプトは、「地域密着型」ないし「市民参加型」である。すなわち、芸術文化に関心の高い人々のみでなく、できるだけ多くの人々に芸術文化に親しんでもらうために、まず、文化施設が立地している地域の人々をターゲットとし、さらに地域の人々とともに芸術文化を創り上げていくという動きである。

このような芸術文化活動は、そのプロセスにおいて、多くの人々の芸術文化への理解を促すことを目指しているので、「芸術普及活動」(すなわちアウトリーチ活動。詳細は後述する)ということもできる。まさに、文化芸術振興基本法が制定され、多くの人々の芸術文化に接する機会の保障が法的に明示されたことを踏まえると、「芸術普及活動」は、そのような政策に沿ったものであり、今後ますます重要なものになると予想される。

以上のような問題意識により、本稿では、現代社会における芸術文化の一つの役割として、「芸術普及活動(アウトリーチ活動)」に注目し、そのあり方を考える。

2. アウトリーチとは何か

(1) アウトリーチの定義

アウトリーチとは、もともとは社会福祉の分野で、クライアント(援助を必要とする人)の表明されないニーズ把握の手法として開発されたもので、ケースマネージャーがクライアントの生活現場や職場、関係している地域の機関などに出向いて課題を解決することをいう^{*2}。いふならば、クライアント本人から直接ニーズを引き出すのではなく、クライアントに関係する周りの人々から、クライアントの表明し得ない潜在的なニーズを把握する手法である。

図表1 アウトリーチの分類

アーティストを地域に派遣したり、作品を外部に持ち出して行う地域派遣型事業(出張コンサート・展覧会等)
 芸術を体験・創作する様々なスタイルのワークショップ事業(美術館での作品づくり等) 子どもや青少年、親子向けに特別に企画された普及事業
 専門家やアーティストの解説付き芸術鑑賞事業(レクチャーコンサートやギャラリートーク等)
 教育普及を主目的とした展覧会事業
 実技指導や専門家育成を行う事業
 芸術の専門的知識を学ぶ教養型セミナー・講演事業
 日ごろ見られない施設の裏側や文化施設そのものを見学・体験する施設体験型事業

資料: 財団法人地域創造, 2001, 「アウトリーチ活動のすすめ - 地域文化施設における芸術普及活動に関する調査研究」

そこから出発した芸術文化におけるアウトリーチは、芸術家（芸術団体ないし文化施設）が、普段、芸術文化に触れる機会の少ない市民に対して、（その生活の場に出向いていって）働きかけをおこなうもので、日本語で表記するならば、「芸術普及活動」あるいは「教育普及活動」と言われるものである。芸術文化におけるアウトリーチは、社会福祉分野におけるように、特定の個人のニーズ把握ではないが、芸術文化に関心の高い人のためだけでない芸術文化のニーズ、すなわち、芸術文化の現代社会に果たす役割を把握する手段としてとらえることができる。

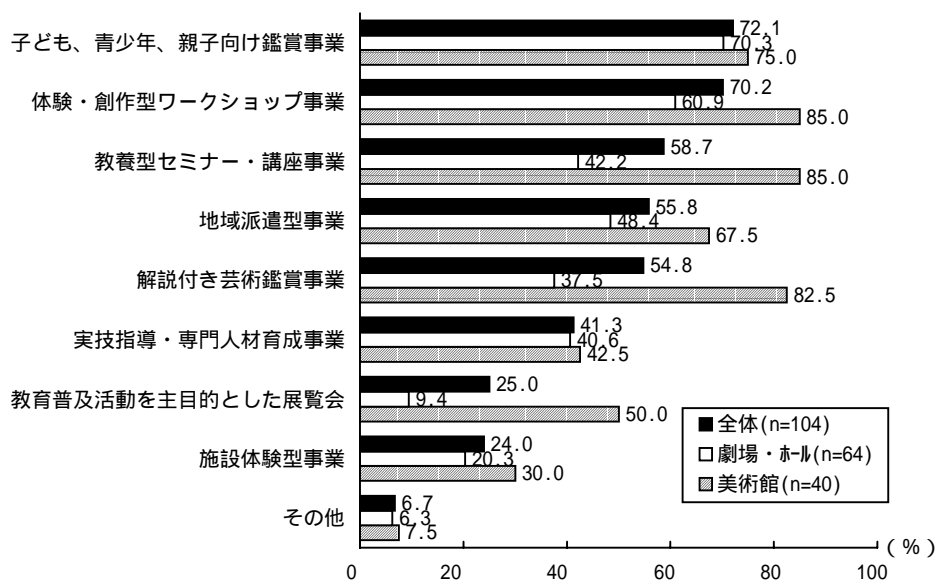
(2) アウトリーチの実施状況

芸術文化におけるアウトリーチの実

施主体としては、劇場、ホール、美術館といった文化施設や芸術家・芸術団体などが挙げられる。文化施設の中でも、美術館における「教育普及活動」としてのアウトリーチは、劇場・ホールよりも定期的に早くから実施されており、取り組みとして定着しているという傾向がある。

また、アウトリーチには様々なタイプがあり、図表1のように分類できるが、実際には複数の要素が複合されたケースが多い*3。実際に実施されているアウトリーチのタイプは、美術館と劇場とでは若干異なるが、「体験・創作型ワークショップ事業」が多く行われているようである。また、美術館の方が各項目とも回答割合が高く、取り組みが進んでいるという傾向がある（図表2）。

図表2 芸術普及活動の実施状況（複数回答）



注：アンケート調査は、芸術普及活動を行っている想定される公立の劇場・ホール118館及び美術館74館（合計192館）を対象に、2000年7月から9月にかけて郵送発送、郵送回収方法により実施された。

資料：図表1に同じ

美術館では「体験・創作型ワークショップ事業」や「教養型セミナー・講座事業」、「解説付き芸術鑑賞事業」の回答比率が高い。一方、劇場・ホールでは「子ども、青少年、親子向け鑑賞事業」や「体験・創作型ワークショップ事業」、「地域派遣型事業」への回答が多い。

アウトリーチ活動への参加に当たっての参加料については、参加者が自己負担するケースと、実施主体側の予算により実施するケースがあり、実施主体によって、あるいは事業によって様々である^{*4}。

アウトリーチの対象者については、(財)地域創造の調査によると、美術館、劇場ともに、「一般市民(不特定多数)」が最も多いが、次いで、小学生、中学生といった子どもを対象とするものが多い。

ここでは具体的事例として、子どもを対象としたアウトリーチ活動を紹介しよう^{*5}。

3. アウトリーチの事例紹介

子どもを対象としたアウトリーチ活動の主な目的は、なかなか普段触れることの少ない、プロの演奏家によるコンサートを間近で体験することにより、子どもの想像力と感性を刺激することである。指導カリキュラムに沿った音楽の授業とは違う雰囲気の中で芸術体験することに意味がある。

これから紹介するのは、NPOトリトン・アーツ・ネットワーク(TAN)による活動である。トリトン・アーツ・ネットワークは、2001年11月にオープンした「第一生命ホール」(東京都中央区)の

自主企画公演の主催団体として「芸術活動」を行うと同時に、地域密着型のコミュニティ活動を行うことを目的に、2001年4月に誕生したNPO(特定非営利活動法人)である。コミュニティ活動とは、第一生命ホールを舞台に演奏する演奏家とのネットワークを利用して、ホール以外の様々な場所出張演奏会を企画・実施することである。その一つとして、アウトリーチ活動を位置づけている。これまでに、地元の幼稚園、小学校、中学校、特別養護老人ホームにて訪問演奏会を行っている。次に示すのは、そのうち、小学校と幼稚園での演奏会の模様である(次ページの囲いの部分)。

このようなNPOトリトン・アーツ・ネットワークの例のように、芸術家とのネットワークを構築し、学校あるいはPTAとの連携により、子どもたちへのアウトリーチ活動を積極的に行っていくとする動きは、芸術団体・文化施設の間で定着しつつあるといえる^{*6}。

また、学習指導要領の改訂により、2002年度から「総合的な学習の時間」(小学3年生以上)が設けられるようになったことも、アウトリーチ活動の可能性をさらに広げることにつながっていくものと思われる。「総合的な学習の時間」は、教科書が無く、体験重視型で、「自ら考え、問題を解決する力をつける」ことがねらいである。異年齢や地域の人々との交流も重視している。したがって、この新科目の目的を達成するためにも、学校側にとっては、地域の教育資源の発掘が求められているといえる。翻って、芸術団体や文化施設にとっては、学校を含め、地

域社会に果たす役割がますます重要になり、「地域の教育資源」としてのニーズに十分に応えられるよう、芸術活動の可能性を広げていく努力が必要である。

小学校でのコンサート

2001年11月、区立の小学校で、スティーブン・イッサーリス（チェロ）と児玉桃（ピアノ）による訪問演奏会が行われた。保護者の希望により、PTAの行事として、TANが演奏家を派遣し実施されたものである。

場所は小学校の音楽室。目の前で繰り広げられる迫力ある本物の演奏に、参加した3年生から6年生までの小学生は、まさに圧倒されていた。また、演奏家自身が、1曲ずつ曲目解説を行いながらの進行であったが、小学生にもイメージしやすいような、わかりやすい言葉で語られた。そのために一層、演奏に対する子どもたちの集中力は高められたようである。実際に、「CDとは違い、弦を弾く音がプツプツと聞こえる」「演奏者の鼻息まで聞こえた」「チェロの音が悲しく感じた」というような、よく耳を澄ませて聞いていたことがうかがえる感想が子どもたちから寄せられた。

幼稚園でのコンサート

2002年2月、区立の幼稚園で、園児とその保護者を対象に演奏会が行われた。きっかけは、「子どもたちに本物のクラシックの生演奏を聴かせたい」という保護者の熱い思いからである。その思いを幼稚園の先生がバックアップして、TANがプロモートを行い、西山健一氏（チェロ）と西山真二氏（コントラバス）の双子の兄弟による演奏会が実現した。まさに、保護者、幼稚園、演奏家、そしてTANとのコラボレーション（共同作業）によるコンサートである。

3歳から6歳までの園児が対象ということで、演奏家自身、「子どもたちが飽きないように演奏することの難しさ」を肌で感じたようだが、選曲の工夫はもちろん、楽器に触らせたり、曲にちなんだ絵を紙芝居のように見せたりして、子どもたちを引きつける演奏会に組み立てた。そのような工夫の成果もあり、3歳児クラスの子どもたちでも、静かに、集中して、「お腹の中まで響いてきた」（園児の感想より）本物の演奏に聴き入っていた。保護者からは、「久々に心が落ち着けた」「癒された」「子どもと同じ思いで話げできた」といった感想が寄せられた。

4. アウトリーチの意義

一般に、ホールや美術館等の文化施設は、芸術文化に関心があり、自分から文化施設に足を運んでくれる層をターゲットとしがちである。しかしながら、「はじめに」で述べたように、芸術文化活動をめぐる環境のめまぐるしい変化により、文化施設も、ただ顧客を待っているだけでは立ち行かなくなる状況に追い込まれている。

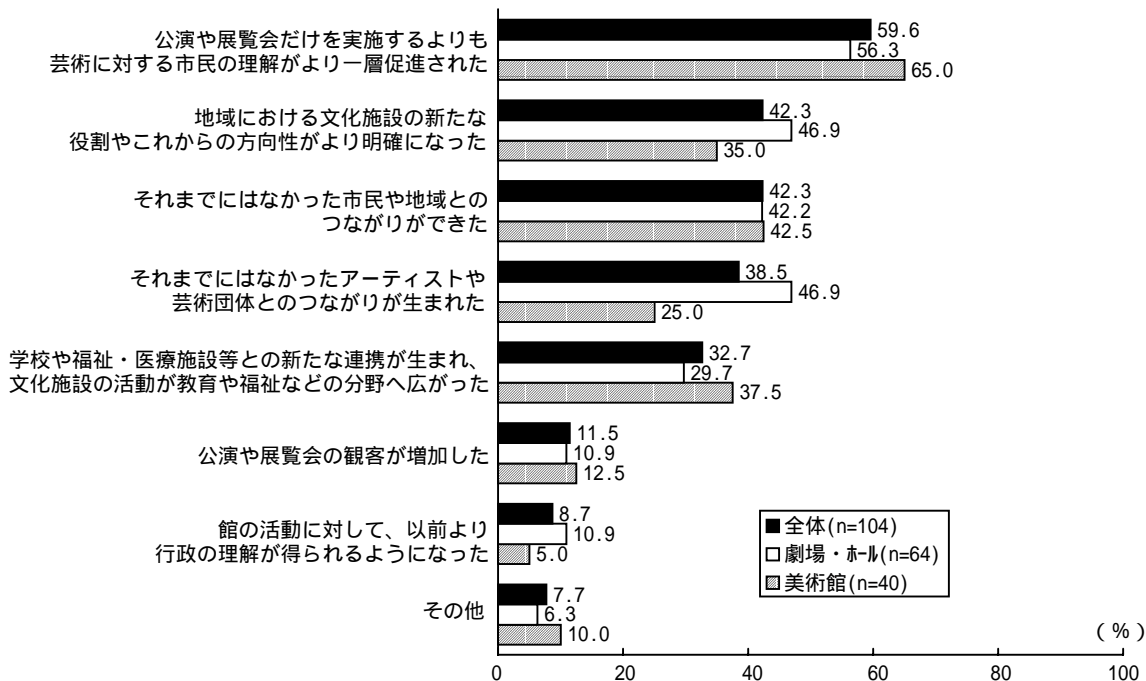
このような中で、アウトリーチ活動を行っている文化施設は、実際にアウトリーチ活動の効果について、どのように考えているのだろうか。先に紹介した財団法人地域創造が実施したアンケート調査の結果をみると、全体では「公演や展覧

会だけを実施するよりも芸術に対する市民の理解がより一層促進された」「地域における文化施設の新たな役割やこれからの方向性がより明確になった」「それまでにはなかった市民や地域とのつながりができた」といった項目の回答割合が高い(図表3)。

このようなアンケート調査結果も参考としながら、アウトリーチ活動の意義について、次に考えてみよう。

まず、アウトリーチ活動は、様々な理由により、芸術文化に触れる機会の少ない人々に、芸術家・芸術団体からアプローチをすることによって、芸術を享受する層のすそ野を広げることに寄与することができるということがいえる。ただし、対象により、意義も様々なことが考えられる。

図表3 芸術普及活動を実施したことによる成果(複数回答)



注：図表2に同じ
資料：図表1、2に同じ

例えば、子どもに対するアウトリーチ活動の場合には、教育的効果及び将来の観客、あるいは「芸術家のたまごの可能性を秘めた存在」として育成するという意義がある。また、一般市民向けのアウトリーチの場合には、芸術活動に興味が無かった人を振り向かせることができれば、「顧客開拓」としての意義がある。さらに、高齢者施設や病院など、ホールや美術館等の文化施設に足を運べない人々を対象とするアウトリーチ活動の場合には、入所者や患者に対しては「精神的癒し(気分転換)」ないし「症状の緩和」による「芸術の効用」が発揮され、芸術文化が社会に果たす役割を広げる可能性を示している。

他方、アウトリーチ活動は、芸術家自身にも大きく刺激を与えることができるということである。そのことは、単に芸術家の活躍の場を広げることだけではない。一握りの芸術愛好家のみでなく、いろいろな対象に向けて、芸術のメッセージを発することで、芸術文化が醸し出す社会的使命に目覚め、より深みのある芸術活動に発展させる可能性に気付かされるということである。このように、アウトリーチ活動を通して、芸術家自身の成長を促すことができれば、わが国の芸術文化がより豊かになる可能性を広げることが期待できる。

以上のように、アウトリーチ活動は、芸術文化を享受する層を広げ、さらに創作する側の創作意欲を高めることに寄与するということができ、このことを通して、わが国の芸術文化をより豊かなものに発展させる可能性を秘めているといえ

よう。

5. おわりに アウトリーチの課題・今後の方向性

これまで、アウトリーチ活動の種類、事例、意義などを紹介してきたが、最後に、アウトリーチ活動を実施する上での課題と今後の方向性を提示して、まとめとしたい。

アウトリーチ活動を実施する上で重要なことは、まず、実施主体である文化施設や芸術団体が、実施先(すなわち受け入れ先、実施場所)や芸術家との多元的ネットワークを構築することである。実施先については、学校や病院、福祉施設をはじめ、自治体や地域の様々な機関・団体などが考えられる。このような諸機関に対して、アウトリーチ活動について理解してもらうための働きかけが必要である。また、芸術家に対しても、実施主体側から理解を得るための働きかけを行うと同時に、理解のある芸術家を「発掘」していく努力も必要である。

その上で、実施主体にとって必要な機能として、実施先と芸術家を結び付けるコーディネーターの役割が求められる。ここで言うコーディネーターの機能とは、実施先と芸術家双方のニーズを把握し、アウトリーチ活動の「観客」(実施先によって異なるが、子ども、入院患者、高齢者、障害者、一般市民等)にとって最も効果的であると思われる実施方法を採用することである^{*7}。

以上のようなことから、文化施設や芸

術団体がアウトリーチ活動を行うには、地域社会内外の様々な機関との結びつきを深めていくことが重要であること、そして、そのプロセスの中で、芸術文化が様々な社会的課題の解決のために、どのように役に立つのか、という視点に立って芸術活動を展開していくことが求められているといえる。すなわち、子どもを対象としたアウトリーチの場合には、教育効果（教育的課題）を、要介護高齢者や入院患者を対象としたもの場合には福祉的・医療的課題を、さらに一般市民を対象とした場合には、芸術文化に対する社会的理解を広げるといった、様々な社会的課題の解決のために挑むことによって、芸術文化の役割を広げ、社会的価値を高めることができる。

さらにそのことによって、芸術文化が一部の愛好家のためだけのものではなく、

「公共性」を有した存在のものであると再確認されることができれば、公の政策としての芸術文化振興の必要性が説得力のあるものとして受け入れられやすくなるだろう。

これまでのハードウェア先行型の芸術文化政策を見直し、より多くの市民が芸術文化を享受できる環境を整えるというソフト重視の政策が必要だと言われて久しい。一方、少子高齢社会に向けて、新しい社会システムの構築が求められている。このような中で、様々な社会的課題の解決をも視野に入れたアウトリーチ活動は、文化政策面でのニーズと社会政策面でのニーズを結び付ける接点として位置づけることができるであろう。今後の展開に注目したい。

（研究開発室 副主任研究員）

【脚注】

- *1 芸術文化には、様々な分野があるが、本稿では特に、美術と音楽を中心に取り扱う。
- *2 伊藤裕夫「文化施設にとって『ニーズ』とは何か（キーワード事典・アートマネジメント 第7回）」文化庁月報 2001年10月
- *3 財団法人地域創造「アウトリーチ活動のすすめ 地域文化施設における芸術普及活動に関する調査研究」2001年3月
- *4 アウトリーチ活動を行うに当たっての費用は、公立文化施設であれば、公費が投入されており、また、民間の文化施設であれば、独自予算、あるいは企業によるメセナ活動として支援を受ける場合もあるというように、実施主体ないし事業ごとに様々である。例えば、コンサートの形態をもつアウトリーチ活動の場合、演奏家にかかる経費も含まれる。また、参加料については、一般の芸術活動（展覧会やコンサート等）では、参加者が一定の料金を支払うのが普通であるが、アウトリーチ活動の場合には、参加者が参加料として一部自己負担をするケースもあれば、全く自己負担無しで全額事業費で賄う場合があるという

ことであり、このような点が、一般の芸術活動と異なる。ちなみに、(財)地域創造の調査によれば、アウトリーチを実施している文化施設の、年間総事業予算に占めるアウトリーチ活動の事業予算の割合を平均すると、美術館では6.4%、劇場・ホールでは22.0%であるという。

- *5 本稿では、子どもを対象としたアウトリーチ活動の事例を中心に紹介するが、アウトリーチ活動の対象としては、ほかに、介護を必要とする高齢者や病院の入院患者を対象としたものなどがある。これからの芸術団体・芸術家の役割として、高齢者施設や病院との協力体制の構築を図ることによって、普段なかなか文化施設に足を運ばない人々の潜在的な芸術活動に対するニーズにいかに対応するかということも期待されているといえる。
- *6 例えば、(財)地域創造が実施している「公共ホール活性化事業」においては、若手演奏家を地域に派遣し、ホールでの演奏会を実施するとともに、地元の小学校等での演奏会を行うという事業を展開している。また、墨田区においては、「すみだトリフォニーホール」を活動拠点としている新日本フィルハーモニー交響楽団の楽団員による学校への訪問演奏に取り組んでいる。さらに、「NPO 芸術家と子どもたち」においても、「総合的な学習の時間」を視野に入れて、「アーティストが小学校へ行って学校の先生と協力しながら、ワークショップ型授業を実施する活動」(エイジラス活動記録集より)を行っている。その他、美術館においても、子どもを対象とした「ガイドツアー」(展示品解説)や各種ワークショップを実施している。
- *7 美術館の中には、資料担当のほかに、教育担当の職員を配置し、その教育担当が実際にアウトリーチ活動を担当しているところもある。

【参考文献】

- ・池上惇編, 1991, 『文化経済学の可能性』芸団協出版部.
- ・伊藤裕夫・小林真理・河島伸子「キーワード事典・アートマネジメント第1回~第12回」, 『文化庁月報』2001年4月~2002年3月.
- ・芸能文化情報センター編, 2001, 『芸能白書2001』芸団協出版部.
- ・後藤和子編, 2001, 『文化政策学』有斐閣.
- ・財団法人地域創造, 1999, 「米国芸術機関の教育普及活動の概要と実際 - 音楽機関を中心に - 」
- ・財団法人地域創造, 2001, 「アウトリーチ活動のすすめ - 地域文化施設における芸術普及活動に関する調査研究」
- ・社団法人企業メセナ協議会, 2000, 「なぜ企業はメセナをするのか? 企業とパートナーを組みたいあなたへ」
- ・吉本光宏「アートと市民・子どもをつなぐ『アウトリーチ活動』 - 芸術による社会サービスの可能性 - 」『ニッセイ基礎研 REPORT』, 2001年10月